

『和歌集心躰抄抽肝要』を翻刻活字化する場合

京都大学附属図書館蔵〔八〕和歌集心躰抄抽肝要

三卷(上中下)三冊 写本 「室町時代末期」写 杜若模様後替布表紙 見返：葡萄描絵斐紙 本文料紙
：楮紙二八・〇×二二・一cm 無辺界半面15行 書題簽の書名：心躰奥書：「貳條殿莫傳内心躰書抽
寫卷第上」傳成阿 永徳参年 三月日傳一日、「貳條殿莫傳内心躰書抽寫卷第中」傳成阿 永徳参年三
月日傳一日、「貳條殿莫傳内心躰書抽寫卷第下」傳成阿 永徳参年 三月 日傳一日」
文 國文學[Ec]11 <169378>

"Waka-shu Shintai-sho chu Kan'yo"

Learned book of waka-style poems.

Hand-written. Muromachi period.

連歌学書。室町末期写の本書が、孤本である。各巻末の識語には、二条良基の伝書から抽出して、永徳三年(一三三三)に相伝されたところがあるが、その真偽は未詳とされている。内容は、「和歌ノ道理ヲ弁テ後詞ヲ分テ連歌ニ可取」との考え方に基づき、部立別にした一九一八首の証歌群、四六九句の例句群に最も多く筆を費やしている。この他、嫌詞(きらいことば)、異名、付合、賦物等、連歌に必要な知識を多岐に渡って集成している。その中に、『連理秘抄』『知連抄』『光源氏一部連歌寄合』などの良基の連歌書と共通する記述を含み、総じて良基時代の地下連歌師間で相伝された秘説を、よく伝

えていると見られる。「作者名乗字」「歌可在韻字」等には、特殊な宛字が使用されている。(H)
〔平成十二年度 公開展示会図録より〕

一 作者名乗字

宗棟曾縁致旨

時説言辰展節秋尅

道住康方建通達陸途

國国訓郡作圓圀

成涉為濟齊登業生政平急于真理也

兼包懷撰金

歳利敏載逸稔早聡智俊速走年

長脩條良度榮永

貞正完學光定

秀莫英

房正直芳頸総

數和量員筭

守瓊積術衡護盛

方良堅象賢

弘博泰尋熙彦寬 〓 廣

是仰惟維時之以正期此焉斯

平衡枚均成位住

諸衆庶認度彦師

近隣周幾壞元庶愛慎迹捨受認親

延脩述序令陳惟言書攻宣順晉誠叙申肆舒暢信

十遠陟遙途寬邈通達

義合由毅佳時徵 〓 (シ+采)若懿善卯良嘉宴政能榮好慶美殊理位主言旨資德賀賢藝可儀

法孝憲明典刑矩記範式章規儀紀度經似義猷象德位藝或乘永令以渲糺尊教則

助扶為典將命匡方副・輔資高弼相祐傳右亮佐

光滿充溢弥實明承盈水三

常恒方虎經

多 耐任堪能

賴資繇依倚自緣仍

高孝堯尊標陟宗舉教右費照楚喬忠正理念賢薰咨予齊直改位資定均覺周明着頭著命鏡信詮章照察郎完
在 〓 卓隆

武建 〓 (・+盖)

安愛康保泰壞壞寧定逸綸休息易

行之章如隨至順將以由充

友共奉倫類丈通知兼朝具興偕定誠 〓 偏僚伴舊俱

真鏡覽鑒觀相臣躬誠信椽孚實

清潔伴洒精淨

興息繼續承調次郎序置

同智慧了解覺里

正雅昌政允尹君齊方途當順藏理均 〓 (竹+盛)將匡賢

繁滋為蕃成茂董蒼重

厚篤京敦渾仍良重

久之舊故貞筭和古

種殖子根胤

清明審玄

秋明鄉信高顯

末標愷季

春治玄晴張

綱綸素伴枝柑木滌幹陳宗繩

持坐用住

織女ノ外巨船ノ櫂ノ葉ニ幾度書ツ露ノ玉章。〔198 ⑤〕

脱替ル・無レハ七夕ニ塩垂衣着乍ソ借。〔198 ⑥〕

袖ヒチテ我手ニ結水ノ面ニ天津星合ノ空ヲ見哉。輔親〔198 ⑦〕

衣打深山ノ庵ノ數モ知又夢路ニ結フ手枕。〔198 ⑧〕

〳晨明ノ月待程ノ袖ノ上ニ固馮メ哉宵ノ雷。〔198 ⑨〕
 〳女郎花開ルハ蒸ル粟ニ似テ姿ハ花ノ如也ケリ。〔199 ⑮〕
 〳梔子ノ色ニソ馮女郎花余ニメテツト固ニ説ナ。〔199 ①〕
 〳祢乱ノ髪ノ中成蟋蟀姦クモ乱鳴哉。〔199 ⑪〕
 〳湖ニ秋ノ山邊ヲ〵テハ幅廣錦トソ見。〔199 ⑪〕
 〳鴻鳴テ吹風空ミ唐衣君待かてに打又夜ソ無。〔199 ⑫〕
 〳時雨ニモ染シ習ノ松ナラハ散又藥ノ色ヲ見テマシ。〔199 ⑫〕
 〳小鹿ノ爪タニヒチ又渴川ノ淺心ハ余訾無国。〔199 ⑬〕

新古今

〳晴ル夜ノ星カ川邊ノ螢カモ余住方ノ海士ノ射玄カ。〔223 ③〕
 〳鶺鴒舩高瀬刺コス音ナレヤムスホヲレ行篝火ノ影。〔223 ④〕

〳龍眼木葉ニ綿木志天掛テ誰世ニカ神ノ代也ト祝初釵 神灌頂。〔235 ①〕
 〳華ニテ萩ノ楊子ノ萩ノ節含テ西ニ向ヘキカハ。〔234 ⑨〕

《一字の文字資料》

あが・む【崇】崇イハフマリアカム。〔295 ②〕
 あげぼの【曙】曙同マリアカム。〔288 ②〕
 あまのはら【天】天アマノソラ、キサム、アメ。〔288 ①〕
 いは・ふ【崇】崇イハフマリアカム。〔295 ②〕

ガク【嶮】嶮カク反山ノ名。〔293 ④〕
 ガク【岳】岳同。〔293 ④〕
 ガク【嶽】嶽カク反岡山、大也、タケ。〔293 ④〕
 ガク【客】客カク反山。〔293 ④〕
 くだ・る【恣】恣クタル神ノ心也。〔295 ④〕
 くだ・る【降】降クタルフル此方、シタカフ。〔285 ⑧〕
 くはしく【精】精タマシイクハシク。〔285 ⑧〕
 ことはぎ【嗟】嗟コトハサ。〔288 ⑤〕
 ころほひ【比】比ナラフタクヒ、コロライ、ナミコロ。〔285 ⑥〕
 とどろ・く【轟】轟トドロク車ノ聲〔292 ⑩〕同〔古今〕天ノ原踏轟シ

とどろ・く【轟】轟トドロク車ノ聲〔292 ⑩〕同〔古今〕天ノ原踏轟シ

なみ・ごろ【比】比ナラフタクヒ、コロライ、ナミコロ。〔285 ⑥〕
 なら・ぶ【比】比ナラフタクヒ、コロライ、ナミコロ。〔285 ⑥〕
 にじ【弼】弼ニシ〔293 ⑥〕
 ぬるたま【夢】夢ヌル玉ウハ玉。〔288 ④〕
 はし・る【羸】羸トドロク。〔293 ⑥〕
 はだ【裸】裸ハダカハタ。〔285 ⑧〕
 はだか【裸】裸ハダカハタ。〔285 ⑧〕
 はなむけ【餞】餞ハナムケハナムケ。〔287 ⑥〕
 とも【众】众トモ。〔292 ④〕

うた・ふ【唄】唄ウタウウタ。〔285 ⑩〕
 うで【腕】腕タラサウテ。〔285 ⑧〕
 うばたま【髪】髪ウハ玉。〔288 ④〕
 うばたま【夢】夢ヌル玉ウハ玉。〔288 ④〕

したが・ふ【降】降クタルフル此方、シタカフ。〔285 ⑧〕
 すみぞめ【夕】夕スミジメ。〔288 ②〕
 そよ・ぐ【戦】戦タハカフソヨク。〔285 ⑤〕
 たぐ・ひ【比】比ナラフタクヒ、コロライ、ナミコロ。〔285 ⑥〕
 たたか・ふ【戦】戦タラフソヨク。〔285 ⑤〕
 たぶさ【腕】腕タラサウテ。〔285 ⑧〕
 たましむ【精】精タマシイクハシク。〔285 ⑧〕
 たまづさ【書】書玉ツサ。〔289 ③〕

鳴雷モ思中ヲハ去ル物カハ〔265 ⑥〕
 ぬた【翮】翮ヌ反ナフル。〔292 ⑥〕
 はげし【癩】癩レイ反ハケシ。〔294 ③〕
 ふもと【岨】岨フモト。〔293 ④〕
 ふ・る【降】降クタルフル此方、シタカフ。〔285 ⑧〕
 ふるまひ【姿】姿フルマイ。〔288 ⑤〕
 まつり【崇】崇イハフマリアカム。〔295 ②〕
 まのあたり【面】面ムカフマノアタリ。〔285 ⑨〕
 まれ・なり【艶】艶ムカフマレ也。〔294 ⑦〕
 むか・ふ【面】面ムカフマノアタリ。〔285 ⑨〕
 むまのはなむけ【餞】餞ハナムケハナムケ。〔287 ⑥〕

〔むらが・る〕【穤】穤。〔287①〕
レイ【癘】癘。ハケシ。〔294③〕

《二字熟語の語彙資料》

あからさま【白地】白地。〔288⑦〕
あけぼの【平旦】平旦。〔288②〕
あけぼの【明發】明發。〔288②〕
あけぼの【晨明】晨明。〔288②〕
あこがるる【浮行】浮行。〔288⑥〕
あぢきなし【無常】無常。〔288⑦〕
あぢきなし【遮莫】遮莫。〔288⑦〕
あぢきなし【無作】無作。〔288⑦〕
あぢきなし【無為】無為。〔288⑦〕
あばらや【野亭】野亭。〔289①〕
あぶらもの【炙炙物】炙物。〔288⑨〕
あまのがは【銀河】銀河。〔288②〕
あまのさくめ【天探】天探。〔285⑥〕
いつか【早晚】早晚。〔288⑩〕
いつはり【詔曲】詔曲。〔288⑥〕
うつたへ【浮物】浮物。〔288③〕

のどか【長閑】長閑。〔289①〕
はこべ【繁蔓】繁蔓。〔284⑥〕
はりこ【破子】破子。〔285⑩〕
ひのためし【氷様】氷様。〔285⑩〕
ひを【氷魚】氷魚。〔294①〕
みづかき／たまがき【瑞籬】瑞籬。〔285①〕
もちづき【満月】満月。〔288③〕

《二字熟語の語彙資料》

いちご【覆盆子】覆盆子。〔283⑧〕
いつまでくさ【壁生草】壁生草。〔283⑨〕
かへで【鶏冠木】鶏冠木。〔284⑥〕
くすだま【續命縷】續命縷。〔288⑧〕
さかき【龍眼木】龍眼木。〔285①〕
すくろのすすき【朱黒芋】朱黒芋。〔284⑤〕
ちはやぶる【千拾捌】千拾捌。〔294⑧〕

捌萬歳經与云儀也。

〔影印資料99頁と292頁を引用〕

をさなし【稚】稚。チヒサシ、イトケナシ。〔285⑦〕
をさむ【為】為。シハサ、タスク。〔294⑥〕

うつろふ【移曆】移曆。〔288①〕
おしひらく【排昧】排昧。〔288④〕
おにやらふ【追儼】追儼。〔288④〕
おもふどち【瞥朋】瞥朋。〔285⑧〕
くぐつ【傀儡】傀儡。〔288⑧〕
こよひ【是夕】是夕。〔288②〕
しがらみ【掬捕】掬捕。御薪。〔294⑥〕
（シヤウジ）【障子】障子。〔294⑦〕
すずむし【侍従】侍従。〔285⑥〕
たいまつ【松明】松明。〔288④〕
たなばた【牽牛】牽牛。〔288②〕
たなばた【織女】織女。〔288②〕
たらひ【手洗】手洗。□
とよ【流水】流水。車名也。〔289④〕
ぬれぎぬ【濫觴】濫觴。〔287⑧〕
ぬれぎぬ【霑衣】霑衣。〔287⑧〕

もちづき【望月】望月。〔288③〕
ももしき【内裏】内裏。九重。〔289②〕
やすらふ【方便】方便。〔282⑨〕
ゆみはりづき【弦蟾】弦蟾。〔288③〕
よすてびと【桑門】桑門。〔285⑧〕
をちこち【遠近】遠近。〔282⑦〕
をとめ【吉女】吉女。〔285⑥〕

つゆくさ【鴨頭草】鴨頭草。〔284②〕
てぐるま【肩兒輦】肩兒輦。〔289③〕
ふかやぶ【深養父】深養父。〔283⑥〕
みそぎ【齊身穢】齊身穢。〔285③〕
やしのひしやく【椰子杓】椰子杓。〔284⑤〕
ゑのこくさ【狗尾草】狗尾草。〔283⑩〕
【年馴松】年馴松。〔292④〕

実際の文字資料を翻刻するとき、幾つかの文字にその特異な字体が含まれていることにまず気付くであろう。こうした文字表記が『和歌集』と冠するこの連歌系統のことば集成の書に見え、この文字様が或意味の特殊性を帯びた日本文献資料にだけ用いられているかで国字〔和製漢字〕の産出される時代の流れを見ることにも成ろう。こうした一語一語の特異な文字で収載された標記語を丹念に検証してみる必要があることは云うまでもない。

例えば、六行目下の「カヘリミル」の文字表記は、「見」文字と顛倒した「見」文字を合体させた、或意味の文字遊び的な要素を含んでいる文字の用い方でもある。通常は、同時代の『運歩色葉集』に見える「顧」「省」「眷」の三文字の表記が用いられるのだが、当代の知識人達における文字様は、こうした通常の標記語では飽きたらず、一興を有する文字表記を用いるに至ったその集大成をこの文字ことば集成の書に見ることが出来る。

「作者名乗字」の「くに」についても室町時代の『頓要集』にも、



とあって、比較してみるに、「訓」「作」「圓」の三字はなく、逆に「口」構えに「民」の字「園」字を『和歌集心躰抄肝要』に見ないといった字種の収載状況に差が見えていることも留意せねばなるまい。